

「夢みずき」の栽培管理の手引き

山梨県オリジナル品種ブランド化推進会議

1. 品種の来歴

- ・「夢みずき」は、山梨県果樹試験場が、早生のオリジナル品種を開発するために、平成12年に「浅間白桃」に「暁星」の花粉を交雑して育成した。
- ・大玉で食味が優れていることから、平成19年に「モモ山梨13号」として選抜した。
- ・平成24年3月16日「夢みずき」の名称で出願公表され、平成25年6月18日付けで品種登録された。

2. 品種特性

- ・収穫時期は果樹試験場（標高440m）で7月中旬（登録時）となり、「みさか白鳳・加納岩白桃」の約1週間程度後、「白鳳」の3日程度前となる。
- ・平均果実重は成木で400g程度と大玉である。
- ・果形は扁円形で、ややいびつとなる。
- ・糖度は15度程度で酸が低く、食味は優れる。
- ・果肉内紅色素は「白鳳」などに比べ多い。
- ・花粉があり、自家結実する。



3. 栽培管理方法

3-1 摘蕾・摘花

- ・花粉を有するので、摘蕾・摘花をせず全ての花を結実させてしまうと貯蔵養分を消費してしまい、初期肥大不良や新梢の生育不良の原因となる。そのため、摘蕾・摘花を実施して貯蔵養分の浪費を防ぎ、新梢の初期生育や果実肥大を良好にする。
- ・残す蕾数は、樹齢、樹勢、せん定の程度などにより異なるので、それぞれの条件に応じて決定する。基本的には、中長果枝は先端と基部や枝の上向きの蕾を摘蕾する。短果枝は基部の蕾を摘蕾する。

3-2 予備摘果

- ・不受精果がはっきりと区別できるようになる満開後20日頃から実施する。摘果の程度は目標とする最終着果量の2～3倍を目安に行う。予備摘果の時点では、果形の良否（いびつ果）を判断するのは難しいので、上向き果や傷果を優先的に摘果する。

3-3 仕上げ摘果

*** 品種特性として、写真1のように果頂部が凹み、縫合線の反対側が盛り上がる「いびつ果」が発生することがある。「いびつ果」は年により発生が増減する。発生が多く見られる場合は、本項の方法に従って「いびつ果」を優先的に摘果する。なお、「いびつ果」は形状は悪いが、糖度や肉質など果実品質には影響しない。**

- ・形状の悪い幼果（図1）は、成熟すると「いびつ果」となる可能性が高いので、仕上げ摘果で、双胚果、変形果、傷果などと併せて優先的に摘果する。
- ・「いびつ果」の判別は生育が進むほど容易になる。
- ・仕上げ摘果もしくは見直し摘果と袋かけをやや遅くすることで「いびつ果」の判別がしやすくなり、作業効率もよい（袋かけの頁も参照する）。



写真1 「いびつ果」

仕上げ摘果時



正常な幼果



いびつな幼果

収穫時



正常果



いびつ果

図1 正常果といびつ果

3-4 袋かけ

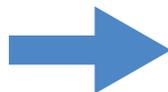
- ・無袋では樹冠上部や日当たりの良い部位の果実に裂果が発生するため、有袋栽培を基本とする(表1)。二重袋と着色増進袋(KMP)で果実品質の差は見られていない。
- ・品種特性として、生理落果の発生が見られるため、仕上げ摘果は最終着果量に対して2割以上多めに残し、袋かけは遅めにするとよい(満開後60日を過ぎた頃から)。

・露地栽培

満開後60日過ぎた頃

袋かけ実施

満開後
50日頃



生理落果が発生する傾向



袋かけ時期の果実の大きさ

3-5 新梢管理

- ・袋かけ後に樹冠内部が暗いと生理落果が発生しやすいため、主幹基部や主枝上から発生した徒長的な強い新梢の摘心や捻枝を行う。

3-6 除袋

- 除袋の時期は袋の種類によって異なる。また、着色期の天候により除袋時期を決定する必要がある。一般的に除袋の適期は、果実の縫合線と尻の部分を除いて果実表面の地色が抜け、淡緑白色に変わるころである。品種特性として着色が良い特徴があり、早めの除袋は過剰着色を招くことがあるので注意する。表2のとおり、二重袋でも着色増進袋でも除袋適期には幅があり、慣行の除袋時期から3日程度遅れても十分に着色する。

表1 果実袋の有無および種類による果面状況

供試樹	試験区	着色 ^{z)}	果点 ^{y)}	裂果 (%)
原木	無袋	4.8	2.1	14.0
	二重袋	4.8	1.0	0.0
	KMP	4.6	1.3	0.0

^{z)} 0 (無)~5 (80%以上) ^{y)} 0 (無)~3 (多)

無袋と二重袋は2014~2016年の平均値、KMPは2014の値。樹齢13~15年生。

表2 除袋時期の違いによる果面状況

袋種類	除袋時期	着色 ^{z)}	果点 ^{y)}
二重袋	慣行	4.8	1.0
	遅延	4.4	1.3
KMP	慣行	4.6	1.3
	遅延	4.5	1.3

^{z)} 0 (無)~5 (80%以上) ^{y)} 0 (無)~3 (多)

二重袋は2014~2016年の平均、KMPは2014の値。また、調査は原木で実施し、遅延は慣行の3日後に除袋した。

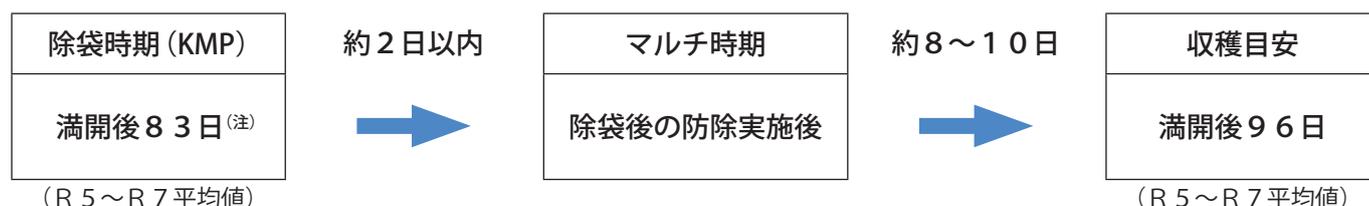
3-7 着色管理

- 除袋後は樹冠下に反射マルチを設置し、着色を促す。徒長枝や樹姿を乱す恐れのある新梢などを中心に捻枝や摘心を行い、樹冠内部の明るさを確保する。
- 果面全体が着色したら反射マルチを除去する。過剰に着色すると赤黒い外観となる。また、果肉内の紅色素も増えるので注意する。

3-8 収穫

- 着色が先行しやすい特性を持つので、外観にとらわれ着色のみを収穫の基準にすると早どりとなり、本品種の特徴である大玉果のメリットを十分に活かさない。また、糖度も低く、食味も不十分となる。
- 樹冠上部の果実は早い時期から肥大しやすく、樹冠内部や下部の果実は、収穫直前に急激に肥大する傾向がある。果実硬度 (2.5 kg) を目安に、早どりとならないよう心がける。
- 育成地 (果樹試験場: 標高440m) における収穫期は7月10日前後 (R5~R7平均値) で、目安として、「みさか白鳳・加納岩白桃」の5~7日程度後、「白鳳」の3日程度前となる。
- 未熟な果実は手で触ったとき果面の毛じがチクチク手に刺さる感触が強く、収穫適期となった果実は、その感触が少なくなる (毛じが寝てくるイメージ)。ただし、収穫が遅れると果肉障害の発生も心配されるので、適期収穫を心がける。

・収穫目安



(注) 除袋までの日数は、満開後1ヶ月間の気温により5日程度変動することがある。その為、地色の抜けを目安に除袋する。除袋時期の日数は、参考程度とする。

4. 病虫害防除

- ・果樹病虫害防除暦「もも（早生種、中生種）」に準じて防除を行う。

5. その他

- ・樹勢維持と大玉生産、核割れ果の発生軽減のため、気象の推移や土壌水分の変動に注意し定期的なかん水を行う。施肥管理は、施肥基準（早生種）に従い、樹勢を見ながら加減する。

6. 幼木・若木の管理（枯死症対策）

- ・幼木は根の張りが浅く、乾燥の影響を受けやすいため、定期的なかん水を行う。
- ・草生栽培園では、養水分の競合を避けるため、根元は清耕栽培とするか敷ワラ等の乾燥防止対策を徹底する。
- ・樹冠拡大と骨格づくりのため、先端と競合する新梢は摘心や捻枝を行う。
- ・軟弱徒長生育を防ぐため、必要以上の施肥をしない。
- ・冬季の強せん定による強樹勢化を回避し、生理落果を軽減するため、生育期（5～6月）に新梢管理や秋季せん定（9月）を行う。
- ・冬季せん定では、切り口からの枯れ込みを防止するため、6年生までの若木のせん定は厳寒期を過ぎた3月上旬以降に実施する。
- ・せん定時に枝の基部を切り残すとその部分が癒合せず、枯れ込みが入ったり、胴枯病菌の侵入口になる恐れがあるため、枝の基部できれいに切る。
- ・切り口の癒合を促進するため、せん定直後に十分量のトップジンMペーストを塗布する。
- ・主幹部から出ている太枝を処分する場合は、枯れ込み防止のため、葉芽のある小枝を数本残す「ほぞ切り」を行う。太枝だけ残して切らない。
- ・特に、幼木のうちは、主幹基部や主枝上から発生した新梢が徒長しやすいので、主枝延長枝の勢力を保つよう、芽かき、摘心、捻枝を随時行う。

問い合わせ先：果樹試験場、各農務事務所、JA 営農指導課
印刷：JA 全農やまなし

作成 平成30年12月
改訂 令和8年3月